

ソーシャルサポートの功罪

——不登校児の母親を対象としたインタビュー調査より——

三 林 真 弓

問 題

文部科学省のまとめ（2002年8月発表）によると、平成13年度の不登校の児童生徒数は、13万8,696人に上り、増加の一途をたどっている。本論では、彼らの『母親』に着目し、不登校をひとつのストレスと位置づけて、論を展開する。

ストレスに対する生体の反応は、外敵から身を守り、環境に適応していくために本来備わった人間の機構である。しかし、現実的なストレス状況が激しく、あるいは長期間続く場合、ストレスを意識的に軽減するか、回避することが重要となる。

ところが、「不登校」は、一度起きてしまえばそれが続く限り、回避しがたいストレスである。しかも、母親には、心理的負担と同時に、子どもへの対応が迫られている。親の立場として、このように高いストレス状況下におかれる状態は、障害児の母親にも通じるところがある。植村（1989）は、障害児をもつ家族のストレス尺度を作成し、ストレス構造を明らかにした。また、Dyson（1997）は、発達障害の子どもをもつ親とそうでない親を比較し、前者の方が親としてのストレス経験値が高いことを示した。Rimmerman（1991）は、重度の精神薄弱児を抱えた母親を調査し、知覚されたソーシャルサポートが、親であることの悲愴感を軽減する効果があることを示した。しかし、不登校の母親が、これら障害児の母親と決定的に違うのは、「も

しかしたら明日にでもストレスそのものが解消されるかも知れない」という可能性が絶えず存在しているということである。このことが、彼女たちに始終葛藤を喚起させ、覚悟の程が定まらない心理状態を作らせる。これは、ある意味、一時期ではあるかも知れないが、障害児の母親より過酷な状態に追い込まれるといえるだろう。

他に不登校が母親に課すストレスとしては、母親が内なる母性を罪悪とみなし、否定的にとらえがちになることも挙げられる（河合，1993）。母親は、日本社会に深く根を下ろしている母性神話に自分を照らして、責め、苦しみもがく。そうすることで、救済されるのだ（橋本，2001）。だが、この作業を子どもへの対応と並行しておこなうことは、決して容易ではない。果たして彼女たちは、この状況をいかに乗り越えるのであろうか。

育児を中心的に担う（ケアする）女性は、自分もまたケアされる必要がある（平山，1999）。自分もケアされて初めて、他者をケアすることに積極的な意味を見い出せるのである。とすれば、不登校児のもっとも身近で対応する母親も、他者からケアされること、支えられることが必要ということになるだろう。「ケア」とは、強者に対して援助するとき用いられがちであるが、袖井（1993）は、強者から弱者へというのではなく、相手に対する配慮や思いやりが「ケア」には含まれており、その根底には相手に対する愛情が存在していると述べている。これは、社会心理学でい

えば「ソーシャルサポート」の定義が、情緒的サポートをベースとしていることと同義であろう。「ケア」と「ソーシャルサポート」は、研究の起源や動きの面からみれば異なっているが、完全に切り離された概念ではなく、強い結びつきをもった研究領域といえる。これらのことから、本研究では、「支え」の概念として、ストレスにさらされた人の適応過程を研究対象とするソーシャルサポートを取り上げる。

不登校をストレス理論のソーシャルサポートの視点から捉えた研究は、子ども本人を対象にはみられるが（蒲田・渡辺，1994；菊島，2001；武田・原，2000；渡辺・蒲田，1994）、母親を対象には、これまでほとんどみられなかった。筆者（三林，2002）は、「不登校児の母親用ソーシャルサポート尺度」の作成を試みた。その結果、サポート源は私的・専門的・学校の3源から構成され、家族と担任からのサポートニーズが多いことが示された。また、その尺度項目に基づいて、面接調査のデータをまとめた。その結果、支え、助けられたと感じたサポートは、相談機関や家族、傷つけられたと感じた相手は、近所の人や担任が多かった。また、サポートの種類としては、傾聴や受容が多かった。これら量的な分析をふまえ、今回は、貴重な母親たちの語りを生かした形で面接調査をまとめてみたい。

目 的

不登校の対応経験のある母親に面接調査をおこない、母親のソーシャルサポートの全容を明らかにすることを目的とする。なお、面接調査の質問領域は、不登校の対応から母親のパーソナリティに至るまで多岐にわたるが、今回は、ソーシャルサポートに限定して報告する。また、不登校の原因や経緯については、ここでは敢えて触れない。

方 法

対象者 首都圏にあるA市内の適応指導教室および相談学級に通う児童生徒の母親がおもであった。A市の不登校者数は、小中学生とも全国平均を上回っている。適応指導教室とは、学校外に設置された小中学生の不登校者に向けた教育の場である。相談学級とは、通称であり、小中学校の敷地内に設置されている情緒障害特殊学級のことである。A市内での公的な不登校者の居場所は、この2機関に限られており、それら機関に関わっている児童生徒は、市内の不登校者のおよそ6分の1程度である。どちらも市の行政機関として、通室・通級システムをとっており、在籍校への復帰を目指している。面接をおこなったうち、きょうだいふたりともに不登校で、各々について語ってもらった場合には、2事例として把握した。よって、全事例は32、母親の実人数は30人（うち2人は、通級・室以外の不登校の子どもを持つA市在住の母親）であった。対象者の平均年齢は43.9歳（37歳～53歳）、専業主婦16人、有職者（パートも含む）14人、最終学歴は大学卒（短大も含む）8人、高校・専門学校卒18人、中学卒4人であった。

面接の手法 我が子の不登校について語ることは、決して容易なことではない。よって、本調査では、半構造的面接の手法をとり、なるだけ、被面接者の語りの流れに沿って、適宜質問を発していくように注意を払った。

面接内容 前川・無藤・野村・園田（1996）の面接調査内容を参考にし、面接項目を作成した。まず、導入の部分で面接の目的とプライバシーの保護について触れ、録音の了承を得た。最初に、不登校の経過を自由に話してもらい、次に用意した面接項目のうち、自由段階で触れられなかったものについて、こちらから尋ね、回答

してもらった。ソーシャルサポートに関するおもな項目は、①自分を支え、助けてくれた人がいたか、それは誰か、②サポートの内容、③今、振り返って他に欲しかったサポートがあるか、④夫のサポート、⑤普段の相談相手、⑥サポート観、⑦傷ついた経験であった。

面接の実施 適応指導教室・相談学級の担任に協力を依頼し、面接可能な母親を紹介してもらい、直接アポイントをとった。面接はすべて筆者がおこなった。所要時間は対象者により違いがあるが、およそ90分程度、面接場所は相談学級などの部屋を借りておこなった。

結果と考察

面接の録音テープから、言いよどみなども含めて発言そのままに逐語録を作成した。逐語録から、面接項目ごとに発言をまとめ、それに基づき、結果を一覧表にして右に示した (Tab. 1)。

①自分を支え、助けてくれた人がいたか、それは誰か 多くの人が複数のサポーターを挙げた。相談・医療機関のカウンセラーはもともと、支援を専門とする人なのであるから、サポーターに選択されて当然といっても良い。ここでは、挙げられなかったケースに注目すべきであろう。また、実家の母親や自分の姉妹を頼るケースが多かったが、一方で、両親や親戚には「知られたくない」、「心配を掛けたくない」と未だにわが子が不登校であることを隠し続けているケースもみられた。サポーターが「いなかった」と回答したのは、＜事例4＞のみであった。彼女は、実母の痴呆症と実父のアルコール依存症を看病しなければならなかった。また、夫も留守がちで、彼女自身をケアしてくれる人はいなかった。対象者の年代は、ちょうどこのように子育てと介護の狭間の世代であり、他の事例でも、介護と同時に不登校の対応に追われていた。

Tab. 1 面接調査の結果一覧

	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7	事例8	事例9	事例10	事例11	事例12	事例13	事例14	事例15	事例16	事例17	事例18	事例19	事例20	事例21	事例22	事例23	事例24	事例25	事例26	事例27	事例28	事例29	事例30	事例31	事例32
家族 不登校のわが子																																
近所の人																																
子の友人の親																																
子の友人																																
担任																																
相談学級等の担任																																
養護教諭																																
校長・教頭																																
上記以外の教職員																																
対応経験のある親																																
相談機関																																
医療機関																																
その他																																

○: 支え、助けられた相手、◎: ○の中でも一層の相手、x: 備つけられた相手、α: サポーターが(もっと)欲しかった相手、二重線の部分は普段の相談相手を示す。相談・医療機関欄の横掛けは、一度も関わりがなかったことを示す。
注) 同セルに同じが複数あっても印は1つにした。◎とx、◎と○が重複している箇所があるが、同一の相手ではない。

石川（1991）は、孫の成長と祖父母の老いが相乗的に関連し、不登校を外在化させ、家族を崩壊の危機に至らしめるのではないかと述べているが、中間世代にある母親に適当なサポーター獲得が困難な状況であることも崩壊の危機に関連するのかも知れない。

②サポートの内容 積極的な介入のサポートというよりも、その時の彼女たちを認め、受容し、傾聴する形のサポートが一番多かった（以下、フォントを変えて事例を紹介する。（ ）内は、サポーターを示す。）。

＜事例1＞「いいんですよ、無理しないで。」（相談機関のカウンセラーの言葉）、
「いいんだよ、今のお母さんの選択で。」
（PTAのお母さんの言葉）

＜事例8＞仕事で忙しかったが、私の愚痴を全部受け止めて聞いてくれた。不登校のことでは、よく話し合いを持った。（夫）

＜事例12＞私の価値観を認めてくれた。励ましてくれたので安定して子どもに向かえた。（妹）

＜事例19＞懇談会の時に話をしたら、お母さん方が共感してくれて心から心配してくれた。（クラスのお母さんたち）

さらに、特に言葉や行動面で具体的な何かを受けたわけではない、いや受けなかったことこそが、サポートとして彼女たちには受け取られている。

＜事例2＞黙認しながら、助けていてくれるだけの状態。口は出さないでいてくれた。（祖父母）

＜事例10＞近所の人も、同級生のお母さんも、主人も、特に何をしてくれたということとはなかったが、非難されたり詮索されたりしたことがなかったので、それが救いだった。

＜事例17＞聞いてもらいたいと思ったら、

いつでも行けた存在。（養護教諭）

＜事例18＞特に同情するでもなし、「大丈夫。」「平気だよ。」とも言わないことが、すごく助かった。（友人）

＜事例23＞学校へ行っても、やっぱり学校はおかしいと思ってるお母さんがいっぱいいらっしゃる。だから話も聞いてもらえて、行っていなくても「どうして？」みたいなのがなかった。（クラスのお母さんたち）

好奇の目で詮索されないこと、いつでも駆け込める所がそこに在るということ、それらが彼女たちの救いとなっている。それだけ不登校の母親が追いつめられた状態にあることを物語っているのではないだろうか。

また、

＜事例7＞同じ悩みを持ってる人がいるのには勇気づけられた。（親の会）

＜事例32＞同じように暴力を振るう子の親もいて、共感しあい、受け容れてもらえた。（不登校の親の会）

このストレスを抱えているのは自分ひとりではない、という気持ちが、母親の不安な気持ちを支えている。そして、自らも語ることで、心が浄化される体験を味わうのである。

＜事例2＞共有した気持ちを話せる。話せると癒しになる。（適応指導教室のお母さんたち）

＜事例6＞聞いてもらってスッキリした。（相談機関のカウンセラー）

＜事例27＞私のたまってるストレスの部分を聞いてくださる。まず最初は、聞いてくださる。愚痴を聞いてもらえたら、かなり気持ちが楽になった。（相談機関のカウンセラー）

行動を起こしてくれるタイプのサポートとしては、身内の者が多かった。

<事例7>きょうだいの面倒をみてもらった。(妹)

<事例11>暴力で疲れ切っていて、誰かにいて欲しい、というとき、泊まりに来てくれた。(姉)

<事例15>担任とのやりとりの橋渡しをしてくれた。あの方の存在がなければ、私は孤独だったかも知れない。(養護教諭)

<事例32>本児の暴力を止めてくれた。(本児の兄)

自分ひとりの力で対応することに限界を感じそうになったとき、上述のようなサポートがあることで、かなりの危機状態を脱することが出来るだろう。

その他、情報を提供してくれるサポートや、

<事例8>本児の気持ちが楽になる、居場所探しをしてくれた。(担任以外の先生)

<事例14>不登校の講演に誘ってくれた。(近所の人)

<事例25>頼りになる本を紹介してもらった。(友人)

具体的なアドバイスを提供してくれるサポートなどがあった。

<事例12>アドバイスを受けショックだったが、私ひとりでがんばらなくてもいいんだと肩の荷が下りた。(医療機関のカウンセラー)

<事例13>選択肢をたくさん作って、子どもに呈示することを教えてもらった。(相談機関のカウンセラー)

<事例17>ちゃんとした答えが返ってきた。相談の予約日が待ち遠しかった。(相談機関のカウンセラー)

<事例28>細かくフォローしていただいて、

電話や助言をくださったり、具体的な例を挙げてくださったりした。(担任)

③今、振り返って他に欲しかったサポートがあるか 上述のアドバイスを提供してくれるサポートを相談機関にもっと欲しかったという回答が多かった。日高(1999)は、サポートが得られない不満は、受け身の態度が関係していると述べている。カウンセラー側は、母親のニーズに応じた支援も必要であるが、母親の主体性を損なわない程度を慎重に考慮する必要もあるだろう。学校側と協力態勢が整わない事例では、やはり担任や管理職の先生方にもっと何とかして欲しかったという声が聞かれた。

④夫のサポート 今回、サポーターとして具体的に調査したのは、夫のみであった。同じ親なのだから、母親と対等の立場で子どもの不登校の対応にあたるべきだという考えもあるかも知れない。しかし筆者は、<事例8>のように、母親が最も身近に子どもと接する立場にあるのだから、夫には妻を最も身近に支える存在であって欲しいと考える。

<事例8>仕事で、ほとんど家にいないのと同じような状態だったので、何をしてくれるというわけではなかった。でも、私自身の不満を、どんなに疲れて帰ってきてても受け止めてくれていた。私の不満を吐き出せる場所があったので、良かった。

ところが、

<事例2>励まされたりした覚えはない。

<事例4>「俺はしらねえよ。」と言う。だから、分かりましたと言うしかない。

<事例20>私の愚痴を聞くのが嫌で、私に任せきり。別にいなくても良かったかな(笑)なんて。

<事例31>意志の疎通は図れなかった。主人も仕事に逃げていて、やっぱりひとりだ

ったという気がする。

といったように、妻を支えるサポーターとしての機能を失っている夫が多かった。それどころか、妻のストレスを増大させる相手にもなっていた。

＜事例6＞帰りが遅くて。朝は、「朝からそんな話聞きたくない。」と聞いてもらえなかった。ちょっとしたことですぐ夫婦げんかをしてた。

＜事例19＞いると気を遣うところがあって、途中から単身赴任してくれて良かった。一番助けて欲しいときに助けてくれず、逆にプレッシャーを与える人なので。

＜事例27＞私の話は聞いてくれたけど、そのあと子どもにあたるので、言ったことが間違いかなと逆に思っちゃう。

下記の発言が、これら大方の母親の本音であろう。

＜事例9＞本当は主人に助けてもらいたかった。

しかし、はじめのうちは無理解でも、次第に協力的になった事例もある。

＜事例18＞夫は、学校には行くべきだと思っていたので、私にもう少し何とかして欲しいという気持ちがあった。けれど、一緒にカウンセリングに行ってもらってから、私を責めるような言い方はしなかった。子どもの卒業式当日、私に「ご苦労様でした。」と言ってくれた。ホントに小さな同志だなと再確認した。

＜事例23＞休みははじめの頃、「学校に行かせないで、厳しくやらないからだ。」みたいに言われ夫婦げんかみたいになったりした。でも、私がやっているのを見て協力してくれるようになった。三者面談にもおっくうがらずに来てくれる。同じ考え方で、

子どもと接することが出来るのが一番心強い。

＜事例25＞荒れ狂ってるときは、夫婦関係も悪い。思いやりもすれ違いだったけれど、だんだん夫も、父親として心配していることが分かった。そして、夫婦で対応していく問題だと理解でき、協力できた。

なかには、不登校をきっかけに夫婦関係が良好になった事例もあった。

＜事例24＞不思議なことに、不登校になったことで夫との関係が良くなった。夫が、子どものことを気にするようになって、二人で子どもをみていこうみたいな気持ちになってくれた。それで、今は私は落ち着いていられる。

このように夫婦が同じ足取り、同じ方向性をもっていることは妻に大きな安心感を与える。他にも、

＜事例14＞一緒に〇〇（相談機関名）へ相談に行ってくれた。最後の決断は家族しかないと思ったから、やっぱりお父さんが一番。

＜事例15＞同じような足踏みで考えてこれたのは、一番良かった。

＜事例16＞私と同じ意見。学校は勉強が大事だから、行かなくちゃ行けないけど、でもまあ無理に行くことはない。

などがみられた。

⑤**普段の相談相手** 不登校以外の出来事で相談する相手は、原家族も含め、家族が一番多かった。その次に多かった回答は、「いない」であった。「自分で考えて解決する」というのである。これは、彼女たちの本来持っている自己コントロール感の高さを示している。と同時に、不登校の対応には相談相手が必要なのであるから、それだけ不登校が彼女たちの自己コントロール

の限界を感じさせる出来事であることがうかがえる。また、普段の相談相手が、決して不登校の対応時もサポーターとして機能するとは限らないことも明らかとなった。

⑥サポート観

＜事例19＞とても必要なことで、必要でないときには必要性を感じないと思うが、苦しい状況になったり悩んでいるときには絶対にひとりでは解決できないことが多いし、ひとりの考えでは良くないことも多いので、絶対に必要だと思う。

＜事例27＞周りからのサポートがなかったら、多分精神的に追い込まれちゃったんじゃないかと思う。

以前、筆者は勤労者のメンタルヘルスについて調査したことがあった。その際、知覚されたサポート量は少なく、効果も明らかではなかった（三林, 1995, 2000）。これは、仕事に従事している人にとっては、サポートの必要性を感じないで済んでいるからなのだということが、上記の発言からも分かる。＜事例27＞は、母親が一種の危機状態にあったことを示している。危機状態は、今まで用いていた防衛機制がうまく機能しなくなったときであり、そのような事態にどう対処するかで、心理的な安定と外界への適応を、同時にする適応的防衛を新たに獲得することができる機会でもある（松本, 1997）。その時こそ、ソーシャルサポートがかなり重要なものとして認識され、その効果が実感されている。自らすすんで不登校の母親になりたがる人などいない。けれど、苦しい中であってこそ、周りの人から生かされている自分をこのように感じるができるのだ。

＜事例11＞ひとりじゃ抱えきれないから、みんなに助けてもらおうって言う感じ。

＜事例21＞とてもありがたい。専門家に相談しないと、一步も前に進めない。

＜事例24＞不登校については、いろんな人

から助けてもらっているのでありがたいなと思っている。そういう人たちがいなかったら、どうなっていたかというのはすごくある。

そして、サポートを受ける感謝の気持ちだけではなく、自分が他者にサポートを与えることについても、積極的に考えられるようになっている。

＜事例8＞人間ってひとりじゃ生きていられないわけですから、いろんなところで人に救われることってある。自分が本当に参ってるときとか、疲れてるときに、人に助けてもらうのって、すごく心地よいこと。そういう心地よさを自分が得られたということは、また反対に、何かで悩んだりとか落ち込んだりした人がいたら、自分の少ない経験とか、生き方みたいな部分の中で、何とかしてあげたいっていうのは、また自然に起きてくることかなと思う。

＜事例10＞一方的に支えるばかりじゃなく、お互いに支え、持ちつ持たれつの関係が大事。

＜事例23＞やっぱり、周りに支えられてるっていうのは、すごいありがたいなって思う。中学で、あとから不登校になった子のお母さんには、自分から声掛けして、会合に誘ったりするような働きかけはしている。

＜事例30＞サポートというのは、いろんな人とちょっとずつ時間を共有している分、ちょっとした心遣いの寄せ集めという感じ。私にとっては、すごく必要なことで、それがなければ生きていられない。でも、なかなかしてあげることが出来ない。してあげられる人間になりたい。

互恵的関係を狭い範囲で捉えてしまうと、＜事例28＞のように、頼ることが負担に感じられる。

＜事例28＞甘えられない。自分が助けた相

手に対しては助けてもらえるけれど、相談するばかりは出来ない。

これについては、＜事例18＞が説明している。

＜事例18＞支えられた方も、何かをしてくれていると思う。はたから見ても、支えてるって見られてる人でも、それは支えてることで、支えられてるんですね。それが人が生きてくってことだと思う。寝たきりの実母は、本人からはお荷物だと感じているかも知れないが、実は、母が私たちきょうだいに、そういう仕事をしていてくれていると感じている。

たとえ一方的に支え、支えられる関係であったとしても、サポートの流れは決して一方向ではない。相手を支え、相手に支えられた両方の体験を通して、初めて実感できるものかも知れない。また、不登校をきっかけに、サポート観ががらりと変わった事例もあった。

＜事例14＞人に世話になるのが大嫌いだった。私の母親も、他人に何にも相談しない人だった。しかし、子どもが不登校になったときに、初めて人間で誰にも迷惑をかけずに生きていくことなんてできないんだって分かった。何かで支えてもらおうと、私も何かの時に人の話を聞くことぐらいはできるかなと思う。人の話を聞くのが好きになった。

＜事例26＞不登校になる前は、結局助けてもらいうイコール迷惑を掛けるという形があったような気がする。助けてもらおうことをしてこなかった。不登校になって、助けてもらわないとひとりで解決できることではないということが分かったので、他のことでも相談できるようになった。

＜事例31＞「人に迷惑を絶対に掛けるものではない。人に世話にはなるな。」という

ふうに育ったので、自分から助けを求めるのがいけないことだと思っていた。カウンセリングを受けた後は、自分の言葉で辛い、嫌だと言っているんだということが分かって、楽になった。

もともとサポートをネガティブに捉えていた母親たちが、不登校での助けをきっかけに変化している。＜事例14と31＞からは、サポート観が前の世代から受け継がれていることが分かる。下述の事例は、ネガティブなサポート観をもった人たちである。

＜事例2＞やっぱり話し相手になるぐらいかな。人にもものを頼むのがすごく下手。

＜事例13＞自分は自分みたいなことがあるのかなと思う。

＜事例16＞特別、自分からは求めないタイプ。

＜事例20＞つっぱっているところがあるのかも知れないが、他から言われるのは嫌。

このような捉え方も、むやみに人に頼って迷惑を掛けてはいけないというのが、この世代特有のサポート観なのかも知れない。

⑦傷ついた経験 危機状態におかれている母親にとって、心が非常に過敏になっているだけに、下述のような何気ない一言や態度にも傷つく場合がある。

＜事例12＞病気で休んだ同級生の子の母親が、「家にいるのが退屈で、学校に行きたがっているのがおかしくて。」と言った言葉がグサッときて皮肉に聞こえた。

＜事例17＞近所の人に子どもの話をすると、「あ、そう。うちは経験がないからね。」なんて言われちゃう。

＜事例22＞マンションの人たちが、「最近よく休んでるわね。」と興味本位で聞いてきたり、「うちの子が、これからずっと学校のプリント、運んでこなきゃいけないのかしら？」と嫌味を言われたりした。

<事例32>子どもの同級生が、道ばたですれ違うときに、「ああ、明日学校休みたいなあ。でも、うちの親は、ずる休みすると怒るからなあ。」と言った。

また、傷つけられた経験の相手で一番多かったのは、担任の先生であった。

<事例5>「不登校の原因は、家庭の事情じゃないんですか？」(学校に相談に行ったときの担任の言葉)

<事例8>担任から「養護の先生が、『ああいう子どもって、思春期になったときに、発作的に自殺しちゃったり、ナイフ持って人を刺しちゃったりするような子になるのよね。』と言っていた。」と聞かされた。

<事例8>小学校の担任に相談に行くと、「私はカウンセラーじゃない。」と言われ、それ以上話せなくなった。中学へ欠席の電話を入れたときに、電話の向こうで「怠学気味の生徒なんですが・・・。」と先生同士が話し合うのが聞こえた。小学校から中学校への申し送りがどうだったのかと、不信に思った。

<事例14>「〇〇ちゃんは、普通の子だと思っていますか？」(家庭訪問に来たときの担任の言葉)

多くの母親は、担任をサポートとして求めている。いずれの事例も、学校と協力態勢を築こうとしている最中にその期待が裏切られている。母親にエネルギーの余裕があれば、とことん担任と話し合って分かってもらえるよう努力すればいいのだが、ほとんどの母親には、その余裕がない。子どもの対応に精一杯で、一度このような体験をすると、もう二度と担任を頼らなくなる。しかも、学校と保護者との間に心の溝が出来た場合、子どもが再登校することは、非常に難しくなる。担任は、保護者への接し方には十分な配慮が必要といえるであろう。相談・医療機関のカウンセラーは、先

の①でも多く挙げられていたが、なかには、かえって傷ついた事例もある。

<事例1>「学校には、行かなきゃいけない。」「お母さんの言うとおり、すごくまじめでいい子だったら、学校に行けるでしょ。何で行けないのかな。」(相談機関のカウンセラーの言葉)

<事例19>相談機関で、いじめの対応を何もしてくれない担任を批判すると、カウンセラーから「先生は、変わる必要がないんですよ。」と言われた。味方がいない、道が閉ざされたような感じがした。

カウンセラーの一言は、先述の近所の人やお母さん同士の何気ない一言では済まされない。傷つけたその言葉の背後には、カウンセラーの別の思いがあったのかもしれない。しかし、思いだけが先走り、目の前に在る母親の心理を考慮せずに発言することは、このように傷を負わせる結果に終わる。筆者も含め、人を支援することを生業とする人々は、このようなリスクを背負っていることを決して忘れてはならない。さて、母親自身でも思いを巡らすような不登校の原因についても、他者から指摘されるとかなりショックが大きい。その多くは、子どもの性格と母親の子育てについての言葉掛けである。それから、不登校に対する偏見とでもいうべき勝手な思い込みも、母親を傷つける刃となる。

子どもについて・・・

<事例4>「そんなのほっときゃいいのよ、甘えてるんだから。わがまま病だから。」

(いじめっ子のお母さんの言葉)

<事例12>「あの先生いい先生だし、おたくの子が悪いんでしょ。」(クラスのお母さんの言葉)

子育てについて・・・

<事例12>「もっと叱らなくちゃだめよ、

甘い顔してるんじゃない？」(近所の人の言葉)

<事例13>「お母さんがそうしていつも一緒にいるから、学校に行かれないんじゃないの。」(近所の年配の人の言葉)

<事例14>「お母さんの育て方が悪いから、あんな風になるのよ。」(子どもが幼稚園の時から仲良くしていたお母さんの言葉)

<事例15>「母親が甘いからそうなるんじゃないか。」(同居の義父母の言葉)。悲しかった。

<事例31>「お母さんが優しすぎるからそうなるのよ。」「わがままに育てたから、何にも言わないからそうなったのよね。」(同じくらいの歳の子どもがいる近所の人の言葉)

不登校に対する勝手な思い込みから・・・
<事例6>「うつさないでね。」(近所の人の言葉)

<事例20>家にこもっているときは良かったが、適応指導教室へ通いだしてから、近所の目が気になるようになった。本人は、平気で近所の小学生と遊ぶが、ある時、その小学生に「うちのお母さんが『〇〇ちゃんと遊んじゃいけない。』って、『学校へ行っていない子とは、遊んじゃいけない。』って。」と言われた。また、別の近所の人から、家を新築したら、「ちゃんと、おはらいした？そういうことがあるんじゃないの、〇〇ちゃんにも。」と言われた。

<事例25>「不登校って幼児虐待らしいわよ。」(同じ団地に住む人の言葉)

<事例32>「お母さんが働いていたから、登校拒否になったんじゃないか。」(同級生のお母さんの言葉)

なかには、良かれと思って伝えたこともあるのかも知れない。しかし、あまりにも根拠がなさ過ぎる。いや、もしその解釈が正しかったとしてもそれを母親にぶつけて何の意味があるのだろうか。母親は、寝ても

覚めても、子どもが学校に行っていないことが頭の片隅から離れることはない。絶えず苦しんでいるのである。その立場を思いやれば、上述のような発言は、決して出来ないはずだ。このように、「不登校児の母親のストレス」は、たんにストレス(子どもの不登校)からダイレクトに発せられる一次的なストレスだけではなく、複雑な人間関係のなかで二次的なストレスがかかっていることが明らかとなった。

まとめと今後の課題

本研究では、不登校児の母親に面接調査をおこない、ソーシャルサポートについての生の声を収集し分析した。三沢(1997)は、1990年代に入ってから、「子どもは家庭が育てる」、特に「母親が育てる」という考え方から、「社会が育てる」という考え方に転換すべき時が来ている、と述べている。しかし、今回の調査から、実際の家庭では、やはり母親は子育て、父親は仕事、といった図式が根強く残っており、夫にもサポートしてもらえず、母親ひとりで丸抱えしている像が色濃く浮かんできた。しかも、子どもの不登校を、父親は困った事態だと捉えるのに対し、母親は我が身が引き起こしたかのように捉え、不登校を未然に防げなかったことにもがき苦しんでいた。「子どもが学校に行けなくなることで保護者としての自信が揺らぎ、学校に行くのは当たり前のことだという信念が揺ら」(安藤, 1993) ぎ、自分が良い親かどうか疑問を抱いてしまっていたのである。社会も、かつての「母原病」という言葉に代表されるように、子どもに何らかの問題が生じれば、すぐに母親の関わり方に原因があるとする傾向があった。これは、「かつて」ではなく、実は今でも脈々と生き続けている。そのことが、⑦傷ついた経験でも明らかとなった。母親は、こうして自分自身を内から責め、そして、そのような風潮の社会に

責められるのである。私たち心理臨床の仕事に携わる者は、このような立場におかれている不登校児の母親のサポートを、いったいどのように考えていけばよいのであろうか。筆者は、ストレスサ自体（不登校の子どもへの対応）を母親の代わりに引き受けるのではなく、母親が主体的にストレスに関わることができるように援護することだと考える。母親自身へのアプローチとしては、3歳児神話や母性神話などに苦しむ母親に対し、「悪い母親」をも自分として受け容れることができるようにカウンセリングしていくことである。それから、母親がこれ以上、むやみに傷つけないために、「不登校」に対する社会の偏見を取り除く努力もしていかなければならない。例えば、学校や地域単位で不登校に関する研修会を開く、といったような取り組みである。今でもあちこちでおこなわれていることではあるが、正しい情報や知識を獲得し、理解を深めてもらうためには、根気強くアプローチしていく必要があるだろう。

以上、小中学生の母親は、子どもの不登校というストレスに直面したとき、一種の危機状態に陥り、サポートを求めるようになること、そして、実際にはその多くがサポートの良好な効果が得られていることが明らかとなった。今後、時系列で経過を追いつながら、どのタイミングで、どのようなサポートが用いられているか、についても詳細にみていきたい。また、ソーシャルサポート以外の変数（母親のパーソナリティや対処行動）についても検討していきたいと考えている。

<文献>

- 安藤公 1993 不登校の家族への援助 精神療法, 19 (4), 350-356.
- Dyson, L. 1997 Fathers and mothers of school-age children with developmental disabilities: Parental stress, family functioning, and social support. *American Journal on Mental Retardation*, 102 (3), 267-279.
- 橋本やよい 2001 「母性神話」という物語 児童心理, 745, 16-21.
- 日高潤子 1999 ソーシャル・サポートとしての家族と支持的面接の効果との関連についての研究 家族心理学研究, 13 (1), 15-27.
- 平山順子 1999 家族を「ケア」するということ 家族心理学研究, 13 (1), 29-47.
- 石川瞭子 1991 「登校拒否児」の成長と祖母の老いとの間に カウンセリング研究, 24 (2), 147-155.
- 蒲田いずみ・渡辺弥生 1994 中学生の不登校児のソーシャルサポートに関する研究 I 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 501.
- 河合隼雄 1993 「文化の病」としての不登校 精神療法, 19 (6), 505-509.
- 菊島勝也 2001 神経症的不登校におけるストレス体験とソーシャルサポート 性格心理学研究, 9 (2), 144-145.
- 前川あさ美・無藤清子・野村法子・園田雅代 1996 複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス<研究報告16> 東京女子大学女性学研究所
- 松本智子 1997 心理臨床からみたソーシャル・サポート 現代のエスプリ, 363, 至文堂 56-64.
- 三沢直子 1997 子育てに対するソーシャル・サポートの必要性 現代のエスプリ, 363, 至文堂 153-163.
- 三林真弓 1995 ソーシャルサポートと心身の健康に関する調査研究 お茶の水女子大学人間文化研究年報, 19, 103-110.
- 三林真弓 2000 心身の健康に及ぼすHealth Locus of Controlとソーシャルサポートの効果 性格心理学研究, 9 (1), 11-21.
- 三林真弓 2002 不登校児の母親をとりまくソーシャルサポートーサポートのニーズと有効性ー お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, 4, 35-45.
- Rimmerman, A. 1991 Mothers of children

with severe mental retardation: Maternal pessimism, locus of control and perceived social support. *International Journal of Rehabilitation Research*, 14 (1), 65-68.

袖井孝子 1993 主婦の家庭外就業とケア機能の外部化 森岡清美(監) 家族社会学の展開 培風館 Pp.222-238.

武田鉄郎・原仁 2000 不登校の経験をもつ慢性疾患児(中学生)のストレス対処特性 特殊教育学研究, 38(3), 1-10.

植村勝彦 1989 家族と心理・社会的ストレス -われわれの研究の現状と問題点- 社会心理学研究, 4(2), 98-107.

渡辺弥生・蒲田いずみ 1994 中学生の不登校児のソーシャルサポートに関する研究II 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 502.

URL

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm

(文部科学省ホームページ報道発表一覧 平成13年度の生徒指導上の諸問題の現状について(速報))

謝 辞

面接調査実施にあたり協力いただきました関係者の方々、インタビューに回答いただきました方々に感謝いたします。

ABSTRACT

Merits and demerits of social support

— Interview investigation for mothers of children with nonattendance at school —

Mayumi MITSUBAYASHI

In this research, interview investigation was conducted to mothers of children with nonattendance at school, and the raw view about social support was collected and analyzed. The interviews were carried out using 30 mothers (the number of subjects was 32 cases.). Consequently, the mother was not only blamed by the primary stress only emitted from a direct stressor, but she blamed herself from the inner side, and she was blamed from the circumference. That had caused the secondary stress situation. On the other hand, many mothers have got two or more good supporters, and were having an experience supported and helped. It will be important to also support those who are engaged in psychological clinical work so that a mother can cope with stressor actively. Moreover, mothers were also having experience in which the surrounding person got damaged excessively because of the lack of knowledge over nonattendance at school. Probably we also have to make an effort to remove the prejudice of society over nonattendance at school, for example having the study session about nonattendance at school.